

日本語日本文化研修レポート

マリアヴォイヴォディッチ

日本という国で留学生であること

一般に「留学生」というと、それはどういうことを意味するのだろうか。それは、多分自分の家族や自分の国から離れて学生生活をするということになると思う。それでは日本という国で留学生生活を送るということは、どういうことを意味するのだろうか。私は、この場合は、いろいろな意味、それも複雑な色合いをもった意味があるのだと思う。

そしてそれは、私達が日本という国で留学生として生活していくときのあらゆる面での存在感に関わってくるものだと思う。私達が、日本という国で生活を始める最初の段階でまず心に浮かんでくることは、「努力」という2文字です。

そして、この努力はこれから日本という国やその文化を理解していく長い道のりの取り掛かりになるものだろう。

日本へ来て最初しばらくの間は、新たな発見や異文化から様々な影響を受ける日々である。この時期に体験することは、日本という国のユニークな文化であり、昔から深く根づいている伝統であり、そしてそれが日々の生活に息づいている様子だ。

日本へきてからの生活体験によって私達が変わっていくこととしては、例えば、日本語が話せるようになることとか、たたみのうでで眠る習慣になれてくることとか、日本料理に親しんでくることとか、上手下手は別として、箸が使えるようになることとか、歴史的に有名な神社仏閣をしばしばおとずれるといったことなどがある。すなわち、私達は、意欲的になって、日本文化の主たるものを経験しそこなわないようにという気持ちで過ごすのです。

ところで、このようなことは、果たして、先に述べた日本という国のもつ特有な文化を真に理解するということだと言えるだろうか。例えば、それは、日本の神社仏閣がその深いところにもっているものを理解することになるだろうか。また、日本庭園を訪れてそこで流れている琴の音色を真に鑑賞できることになるだろうか。日本に古くから伝わる伝統が、現代でもなお静かに息づいているということに気付くだろうか。

日本の文化を知ろうとする熱心な努力を続けることを通して、日本への理解は深まり、それが徐々に日本の文化を愛する心へと熟していくのであり、このような長いプロセスを経て日本とその文化を真に愛する心が養われていくのだと思う。

そして、後に自分の母国へ帰った後、日本での滞在をなつかしく思い出し、そこで経験したことをいつまでも大切にしようという気持ちを強く抱くようになるのだと思う。

日本の現代文学を学んで

私は留学生としてユーゴスラビアから日本にやってきた。数年前に、ベオグラード大学で日本語を学び始めた。その時以来、日本にも親しみを持つようになった。日本語と日本という国に対する興味が深まり日本へ留学する望みも強くなっていった。

日本へきたのは去年の10月である。広島大学に留学し、そこで一年間日本の現代文学を研究してきた。一年間で、日本の現代文学について多くのことを学んだ。

しかし研究することは決して易しいことではない。日本の文学を研究する留学生たちは、いくつかの問題に直面する。まず、日本語を読む能力が、文学作品を読める程十分ではないということである。それに日本語自体が難しい言語であるということも問題の一つである。一般的に文学を研究するためには文学作品に書かれていることを理解するということが一つの条件である。しかし前に述べたような理由のため、私達にはそれが非常に困難である。

勿論私達は、日本文学の作品を訳版で読むことができる。しかし訳版の翻訳では、日本語の表現の美しさが十分に伝わらなかったり、微妙なニュアンスが変わってきてしまい、誤解も起こりやすい。そのため、作品を本当に鑑賞することができない。

このように、日本文学を研究する留学生は、多くの困難に直面する。けれども、日本にいと、日本で生まれた作品を原文で読む機会が多いし、作品の舞台を直接訪れることもできる。

私もこの一年間のうちにいろんな作品を読み、日本の文学をより身近に感じるようになった。

特に、私は川端康成の作品に興味を抱き研究してきた。川端康成が文学の世界でどのような位置にあるのかは、ここでは述べる必要はない。何故なら彼は世界的に有名なノーベル文学賞受賞者であり、彼の作品は多くの人々に親しまれているからである。その中で「雪国」という作品は川端の代表作であり、私が、日本語で読んだ最初の作品である。そこで私は「雪国」について少し触れてみたいと思う。前に述べたように留学生である私が原文で読むことは非常に困難なことであり多くの努力と時間が必要であった。けれども、「雪国」の素晴らしさと、特に表現の美しさを味わうことができたのは私にとって非常に良い経験だったといえる。

私は、以前にユーゴスラビアで「雪国」の訳版を読んだことがあった。しかし前に述べたように訳版の場合には原文の良さや美しさや微妙なニュアンスやその風土などが十分に伝

わらない場合が多く、特に川端康成の作品の場合、原文と訳版の差が大きいといえる。だから、実際に原文を読んでみて、訳版で読んだ時とは全く違う感想を持つようになった。原文で読んでみると、「雪国」の文章の美しさや簡潔さを読み取ることができ、この作品の本当の良さがわかるようになった。また、この作品を読むことで、日本語への親しみも深まり、日本語の美点を学ぶことができた。

「雪国」は日本の小説には珍しい心理小説であり、主要な登場人物三人「島村、駒子、葉子」の心の微妙な推移が、簡潔な文体で描かれているように思える。

タイトルについても、訳版では気付かなかったが、「雪国」という言葉は、日本人にとって特別な意味をもっているようである。それは、恐らく、「閉ざされた世界」を意味するのだろう。したがって、島村、駒子、葉子の3人が現実からはなれた遠い場所、空間で純粋に誠実に生きている姿が美しく描かれているといっても良いであろう。

また、「雪国」は地域で言えば、日本の北国がイメージされるが、日本人には、やや非現実で、ロマンチックなイメージにもつながっているようだ。

次に、登場人物の名前についてであるが、訳版では、実に音だけで表されているに過ぎないが、日本語の表記（漢字）は特別な意味があるのだと言える。例えば、駒子の「駒」は動物であり、葉子の「葉」は植物である。恐らく川端は、駒子に動物のイメージを与え、葉子に植物のイメージを与えているのだろう。比喻にしても、やはり、駒子には、動物の「ひる」が選ばれているし、葉子の描写では、動物的イメージが避けられているように思える。

物語は、この駒子、葉子二人に島村を加えた三人を中心に展開していく。「雪国」のテーマは恐らく“愛の可能性”ということであろう。つまり、先に触れた、動物のイメージで描かれた駒子との愛が、男と女の肉体的愛を描き、植物のイメージで描かれた葉子と島村との愛が精神的な愛を描いている。しかし、そうはいつでも、二人の愛の姿は決して対立しているのではなく、「雪国」という“閉ざされたロマンチックな場所”に包み込まれているのである。そこには、人間のいろいろな営みと自然とが融合されているのである。

このように「雪国」は極めて象徴的な作品と言える。しかし、私にはまだまだ雪国の深い意味が十分に理解されているとはいえない。辞書的な意味がやっと掴めただけで、川端が文学の言葉として持っている言葉はよく分からないところがある。また、この作品にしばしば、音楽的ともいってよいくらいに用いられている“さびしい”、“悲しい”という言葉が意味するもの、その情調がはっきりつかめない。

こうした課題がまだまだ残されているので、これからも今まで以上に努力をし、日本文学を研究していこうと思っている。